

霜柱

古山円造

一億回の飛翔を経て

残機残りわずか

空気が汚いと言ったのは知らない人

どこからか収束して

死んだようになった樹木の奥ゆかしさ

耳元を通過する羽虫が

直線の刃物をケツに引っ提げている
なんて

街に漂う煙の香りと

急いで帰る自転車たちが

公園通りのせめてもの賑わい

生姜が転がってきた、それも、瞼を超えている

酷いセリフも

小刻みに

逆陽炎の餌

もう一度明るくなったら

小さな足跡がはつきり

へっぴり腰の苔を好きな娘に会わせてやる